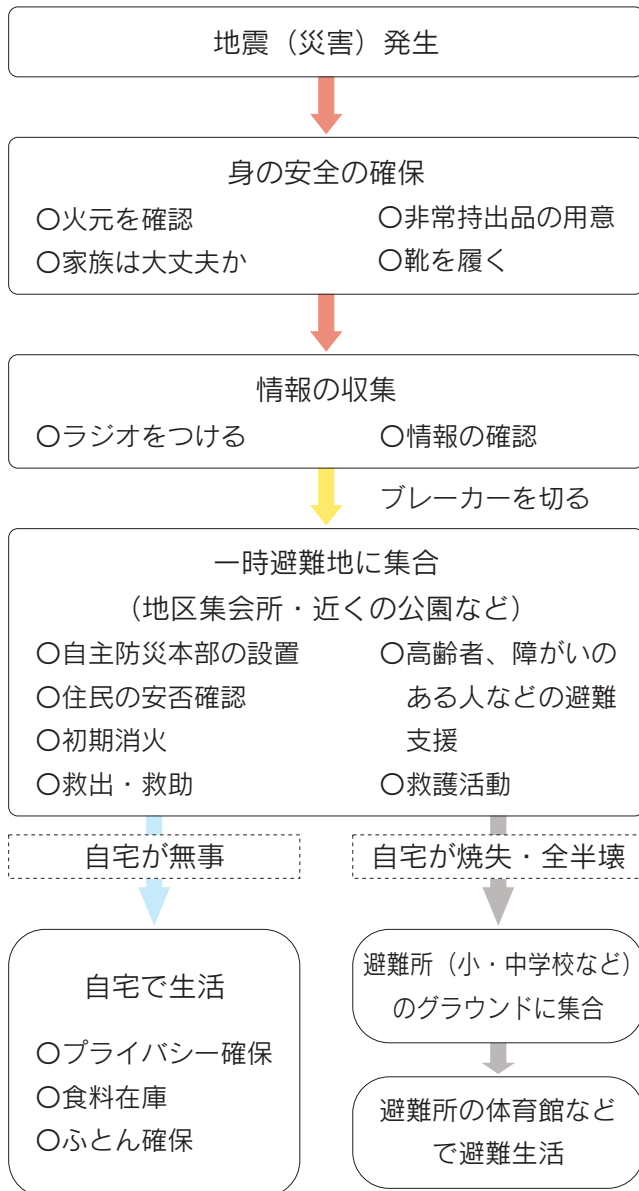


# 災害時に共に助け合えるコミュニティづくり

避難が必要な大規模災害時に力を発揮するのは地域の自主防災組織です。今回は、地震発生時の行動の流れをまとめましたので、自主防災訓練などに役立ててください。

## 『共助』

### 地震発生時の市民の行動



### 非常持出品の確認

非常持出品は袋に入れて、すぐに持ち出せる場所に置いていますか。また、避難地まで持って動ける重さですか。確認をしましょう。



### 地震に備えて地域で訓練

#### 訓練内容をチェック

- 安否確認（黄色いハンカチ作戦実施）
- 高齢者、障がいのある人などの避難支援（避難支援が必要な家を確認。訓練にて支援を実施）
- 初期消火（消火器、可搬式ポンプ、バケツリレーなどによる消火）
- 救出・救助（家から避難地まで担架搬送を実施）
- 救護活動（三角巾の使用方法を確認）

いつもの訓練のほかにも…避難所単位でも、レイアウトの区画作りや入室訓練、仮設トイレの設置などの訓練を実施しましょう。



▲避難所運営訓練の様子（区画作り作業）

### 市からの情報の収集方法

市ホームページ、ソーシャルメディア（Facebook、Twitter）、市民メール（みしまるホットメール）などのツールで情報をお届けします。詳しくは、市ホームページをご覧ください。

#### 避難所の開設について、よくある質問

Q. 避難所は、地震が発生すると、いつでも開設されるのですか？

A. いいえ。市内で震度5強以上が発生したとき、すべての避難所を開設します。また、自主避難した人がいる場合にも開設します。

## 終戦直後からの 社会の民主化の動き — 庶民大学三島教室 —

前のこととして多くの国民に受け入れられている主権在民や二院制についても発言者によって賛否が分かれました。終戦から一年も経っていない時期だけに、変革の真つただ中にいた人たちの真摯な姿勢を見てとることができます。

今年(2016年)は第二次世界大戦の終戦から七十周年の節目の年に当たります。終戦は、単に一つの戦争に負けたというだけでなく、これを契機として領土が縮小され、非軍事化や民主化のためのさまざまな変革が行われ、社会が大きく変わっていききました。なかでも憲法の改正は政府だけでなく民間の多くの人たちが関心を寄せ、議論や意見の表明がなされました。

新しい日本国憲法は昭和二十一年(1946年)十一月三日に公布されますが、この年の六月、三島でも憲法改正草案についての市民検討会が行われています。会場は西国民学校(現在の西小学校)講堂で、参加者は約七十名、四時間にわたるものでした。検討会では主権のあり方や戦争放棄、国民の権利などさまざまな点について賛成・反対の意見が出され、活発な討論が展開されました。現代では当たり

前のこととして多くの国民に受け入れられている主権在民や二院制についても発言者によって賛否が分かれました。終戦から一年も経っていない時期だけに、変革の真つただ中にいた人たちの真摯な姿勢を見てとることができます。

この活発な市民検討会は「庶民大学三島教室」が主催したものです。「庶民大学」は終戦直後の数年間、地元の文化団体と若手知識人により生まれた教育文化運動で、三島近郊に疎開していた若手の労働法学者・木部達二が中心となって組織されたものです。

民主主義、教育、経済学から文学や映画など広範囲にわたる講座が開かれ、講師陣も政治学者の丸山真男、歴史学者の石母田正など若手第一線の学者が招かれました。彼らによる講座は多くの聴講生にとって有意義なものとなったばかりでなく、聴講生との質疑応答や意見交換は新進気鋭の講師にとっても大きな刺激となったようです。庶民大学の活動は講座の開講に留まりませんでした。機関紙「庶民大学通信」が発行され、「読書部」という書籍販売部門も活動します。庶民大学の活動はひとつの教育文化運動として展開してい

たのです。

先の市民検討会は、その前に合計七回におよぶ講座を行ってから開催されたものでした。このような事前の学習があったからこそ検討会での活発な議論となったといえます。また、検討会の様子は「庶民大学通信」に掲載され、当日参加できなかった会員にも伝えられました。

庶民大学はさまざまな事情から昭和二十四年には活動を停止します。しかし、その成果は市民の中に受け継がれ、昭和三十八年からの石油化学コンビナート反対運動において、市民による学習活動を基盤にした活動の展開に繋がっていききました。



▲庶民大学通信 (昭和21年)



三島の村名②  
やすひさ  
安久村  
(中郷地区)  
— オテンノウサン —

中郷の各地区では七月初め、夏場のはやり病や害虫の駆除を願ってオテンノウサンと呼ばれる祭が行われます。いくつかの神社では、ふんどし姿の男性が祠に格子状に荒縄をかけた手造り神輿(みこし)をかつぐ勇壮な祭となっています。

安久では御神楽天王さん保存会が中心となって行われ、王子神社内で神輿を造って供物を供え、担ぎ手全員でお神酒を飲み干した後、太鼓の音と共に夕刻神社を出発します。麦わらが燃やされ、わっしょいの掛け声の中、さかんに水を掛け合い集落全体が盛り上がる様は、まさに男の祭です。夜も更けたころ神社に戻り、荒縄を外した神輿の祠部分を安置して祭は終わりとなります。

安久では一度途絶えたこの祭が復活して今年で三十四回目。ライフスタイルの変化により各地で伝統行事の存続が危ぶまれています。が、保存会の呼びかけもあり若い参加者も増えてきているそうです。



▲神輿を担ぐふんどし姿の男たち